

ハレの歌と短歌結社 小林賢太

『歌壇』六月号に掲載された三枝昂之・坂井修一の対談では、佐佐木信綱への言及があり、そこから話はハレの歌へと広がる。

ケの歌が中心となった近代短歌の世界で、信綱はハレの歌にもきちんと眼を向けており、だから彼は興味深いのだと三枝は言う。では、ハレの歌とはどのような歌を指すのだろうか。式典の歌でも、個の内面を見つめるタイプの歌は少し違うように思う。例えば、園遊会という真正正銘のハレの場で詠まれた一首。

・両陛下をかこむ人群あめ煙る池のかなたにしほし見て立つ
(岡井隆 『大洪水の前の晴天』)

客観的な観察者としての眼差し、また人群との距離もあるためか、ハレの歌というより優れた写生歌に見える。一方、次の二首はハレの歌と感じられる。一首目はご子息の結婚式の歌、二首目は竹山広氏の斎藤茂吉短歌文学賞受賞に際しての歌。

・とりどりの花をあつめて春光る御園に響くウエディング・ベル
・山桜いまだ散らずに待ちくれし師の受賞式五月十二日

(三輪良子 『木綿の時間』)

先の岡井詠との違いは何だろう。キーワードは共有と肯定ではないだろうか。右の二首は祝意をその場の皆と、あるいは花々と分かち合っている印象がある。かつてのハレの歌は、歌合のような公の席でその場の人々と共有する歌を指したが、そうした場が

失われた現代では、場や時を誰か(時にそれは人間以外の存在)と共有・肯定する歌を、ハレの歌と感じるのではないだろうか。そう考えるとき、式典ほど大きな節目でなくてもハレの歌は詠める。同じく『木綿の時間』より、母の日に詠まれた歌を引用する。

・梅檀の花の間に広がる真青なるそら母とあふげり

直前には「あと何度こんな時間が来るのだから靴を履かせて杖を持たせて」の一首がある。その時、その場をご母堂と共有・肯定する姿勢は、私にはハレの歌に思える。また、共有する相手は他者でなく、過去や未来の自分でもハレの歌になり得るのではないだろうか。同書より、誕生月に詠まれたと思われる一首。

・子を三人生みて育てし歳月はたとへば木綿のやうなる時間

これまでの過去を「木綿の時間」として肯定し、その時その時の自分たちと共有しているように見える。また、作者の顔を知っているなら読者もその感慨を共有できるだろう。このように共有と肯定を感じさせる歌は、日常の中のハレの歌と言えるのではないだろうか。現代のハレの歌とは、流れゆく日常の中で立ち止まり、過去や現在に意味を与え、その時や場を誰かと分かち合う言葉のように思える。近現代短歌はケの歌中心と言われるが、短歌表現の幅広さを考えるとき、ハレの歌の存在は欠かせまい。

こうした歌は、若い世代よりベテラン世代の方が自然に詠めるのではないだろうか。そして、異なる世代の歌人同士が自然に繋がるのが、結社という集団・場のように思う。互いの顔が見える公的な歌の場が少なくなった現代において、短歌の多様な表現を肌で感じられるのが結社の良さのひとつである。